

# ニューメキシコのアドベ建築に関する一考察

加藤 薫

## はじめに

本稿では、アメリカ合州国サウスウエスト地域の風景の中でも最も印象的でモソシアルな人工物であるアドベ建造物の構造に関する考察を行う。アドベ建造物の耐用年数は、どんなに手入れが良い物件でも80年程度と言われており、一般に築後30年以上を経たものは、修復や再建を繰り返してきたものである。このため最古のアドベ建造物を特定したり、プロトタイプなるものを定義することは難しい。一方、その地面から土色の角ばったキノコがはえたような外観には時代を越えた共通性が感じられる。その理由は少なからず建材に規定された基本構造に拠る。

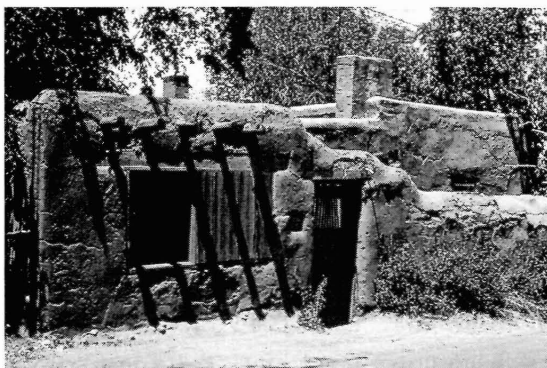
アドベ建造物はネイティブ・アメリカンの一集団であるプエブロ・インディアンの伝統生活と密接な関係にあった。そしてアメリカ合州国サウスウエスト地域が「新しいメキシコ」<sup>(注1)</sup>と呼ばれたスペイン植民地時代には植民者の生活環境に導入された。この伝統はメキシコ時代、そしてアメリカ合州国に併合された時代以降も受け継がれ、現在に至っている。家具類はこのアドベ建造物の存在を前提に制作された。家具だけでなく、織物、宗教オブジェ、什器、生活用品全てがアドベ建築に適合するように制作された。そして建材の制作から流通、建設作業までのプロセスを考えるとコミュニティー全体がかかわっている。先に結論めいたことの述べてしまえば、スペインの建造物とはもとより、メキシコのものとも、支配的なアングロ文化の建造物とも異なるサウスウエスト地域固有のパノキユラーな建造物となっている。

本稿は筆者が1995年及び1996年に実施したニューメキシコ州タオス市近郊に住む建築家で美術作家でもあるアニタ・ロドリゲス女史の施工による民家建設時の取材と、タオス・プエブロにおける夏期の修復作業の観察、アルバカーキ市内で4か月間宿舎として利用したカサンドラ・レイド女史の実家の修繕作業に従事したフィールド・ワークで入手したデータをベースとしている。いささか旧聞の資料だが、発表する機会もないまま埋もれてしまった研究ノートを整理したものだ。

## 1

アドベ建造物は通常は平家のことが多いが、タオス市近郊に住むタオス・プエブロ・インディアンの集合住宅のように、伝統工法でも3階建て、4階建ては可能だし、サンタ・フェのホテル「イン・アート・ラレト」のように内部は現代建築の構造体や素材を使いながらも、外観はアドベ建築の意匠を全面的に取り入れている中層ものもある。(図版1、2、3)のっぺりとしていて装飾物を排した外壁からは現代的な機能性ととも、いかにも人間の手作りによる空間の容器といった暖かさがあり、ニューメキシコの自然とも調和した独特の雰囲気をもっている。

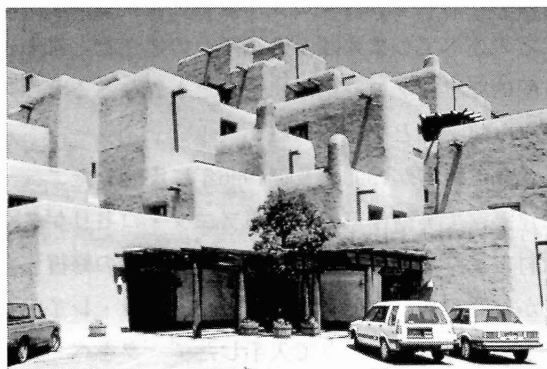
アドベとは、アラビア語を語源とするスペイン語で、「土で作られた燃えないブロック」のことだが、日本語では「日乾しレンガ」と訳される。ちょっときどってアドビーと撥音する人もいるが、英語では別にドウブ(daub)という言葉も使う。



図版1



図版2



図版3

西欧の歴史ではローマ帝国が北アフリカにも領土を拡大して以来、アフリカの泥土ブロック建築工法が地中海を通過してイタリアに伝えられ、やがてフランス、イギリスにも伝播した。アメリカ大陸のイギリス植民地でも一時期使われてた建築素材だが、ニューメキシコのアドベ建築の系譜はこれとは異なり、プエブロ・インディアン建築の伝統の上にスペインから伝えられた技術が加わったものだ。<sup>(注2)</sup>

サンタ・フェでは、19世紀後半までは主として輸送上の問題があり、西欧建築様式にそのまま対応した建築資材はほとんど手に入らず、また建築技術者もいなければ大工道具類も揃うことはなかった。こんな事情から、廉価で迅速な建設が可能で、夏は涼しく、音を吸収して静かなアドベを使った工法が植民者の住居や公共建造物に取り入れられた。21世紀には地球環境にやさしいエコロジカルな建築という意味で積極的に見直しされているし、すでに1980年代からポストモダン建築の事例としても注目されていた。<sup>(注3)</sup>ここではヒスパニックのアドベ建築とプエブロ・インディアンのアドベ建築を主として工法面から比較検討しながら、その特徴をいかした現代建築への応用例などを紹介する。

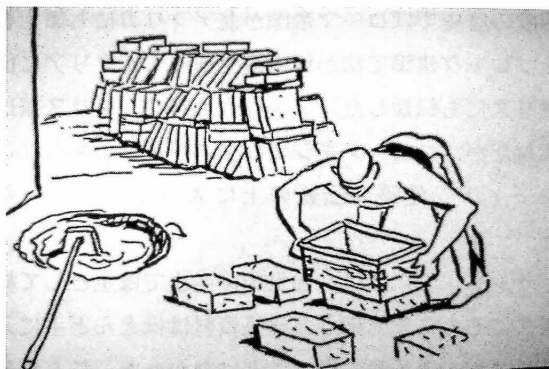
## (1) アドベについて

アドベ建造物は一般に最後の仕上げ段階で漆喰が上塗りされることもあって、外見からは工法の区別がつかないことも多い。しかし一口にアドベ建築といっても、プエブロ・インディアン伝統のものと、スペイン人到来以降のものの中には大きな違いがある。その違いを検証して見よう。

アドベ作りはまず粘土質の土層を掘り起こすことから始まる。プエブロ・インディアン伝統の掘り方はまず直径1～2メートルの穴を掘り、掘り起こした土を篩いにかけてたりして可能な限り細かくする。次に水を注ぎやわらかい泥状にする。その泥を足でこねまわし十分に攪拌する。ここまでのプロセスはスペイン式でも変わりはない。但し、スペイン人の持ち込んだ労働用の家畜が使えるようになってからはこの攪拌プロセスを動物の力を借りておこなうのも可能となった。プエブロ・インディアンの伝統製法ではこの攪拌工程で細かく刻んだ草やトウモロコシの葉や茎を一定量混ぜる。これは乾燥プロセスで発生するひび割れを防ぐものだ。しかしスペイン人到来以降は西欧から移入された草食性動物である牛や

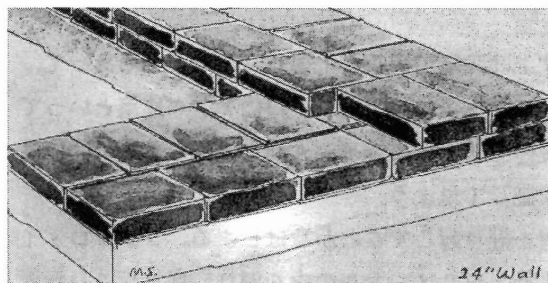
馬の糞を混ぜるようになった。糞には細くなった植物繊維が大量に含まれているからだ。最後に砂を混ぜ、理想とする固さと乾燥速度が得られるよう調整する。(図版4)

プエブロ・インディアンのアドベ建築では、この素材を整形せず容器で運んだ泥状粘土を地面に直接積み上げて



図版4

いった。壁の厚さは天井の高さや部屋の大きさによって異なるが、大体20センチメートル位が標準だった。1段積むと壁が平らになるようにならし、全体が乾燥するのを待って次にまた1段積むという工法だった。スペイン人到来以前の新工法として、あらかじめ手で亀の子状に粘土を固めておいてそれを積み上げ、隙間を同質のモルタル粘土で埋めて行く方法も創案したようで、これはスペイン人たちが定義するアドベ工法に近いものになっている。(注4) (図版5)



図版5

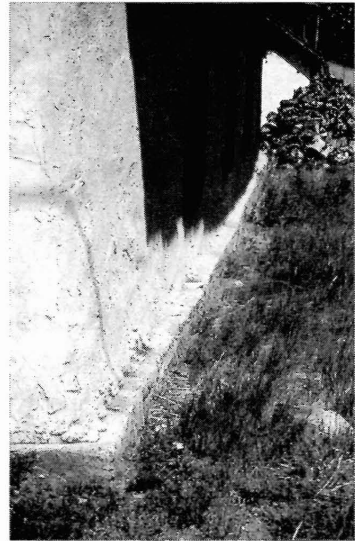
スペイン人植民者達が持ち込んだアドベ工法は、この粘土素材の生産性を高めたものである。まず丈夫な木材で木枠モールドを作る。植民者達の建造物で使われたアドベの平均的な大きさは大体縦25センチメートル、横40センチメートル、厚さ10センチメートルというものだった。プエブロ・インディアン達もスペイン人に習って木枠を使うようになったが、レンガの大きさは縦が20センチメートル位と短く、その代わり横幅が50~60センチメートル、厚さも15センチメートル位と大型になっている。(注5)

木枠モールドは底がなく、平らな地面、あるいは石や板の上にあらかじめ水で濡らしたその木型を水平においた後、準備した粘土素材を中に詰める。そして上

部で盛り上がった余分な泥を水平にならした後、木枠から抜く。木枠を含めた乾燥前の粘土ブロック1個の平均重量は植民者サイズのもので1個約20キログラムぐらいだった。<sup>(注6)</sup> 天候や労働時間にも左右されるが、2人がかりで1日約100個位は生産できたようで、これを壁面積に換算すると大体10～11平方メートル分ということになる。

## (2) 基礎工事と壁

プエブロ・インディアンのアドベ建築とスペイン人植民者のアドベ建築の違いは、基礎工事部分から顕著になる。植民者たちはアドベを積む前に岩石で基礎を作る。地面を少し掘り下げてまず碎石を敷いてから大きめの岩石を並べ、地上から20～30センチメートルの高さで水平を測り、その上からアドベを積んでいった。石組み基礎は雨や風化への対策で、下回りの耐久性が増した。(図版6) 部屋の形の基本は四角だった。従って四隅が出来るということだが、角にぶつかるブロックにはあらかじめ凹凸をつけておいてうまく噛み合うよう重ねていった。



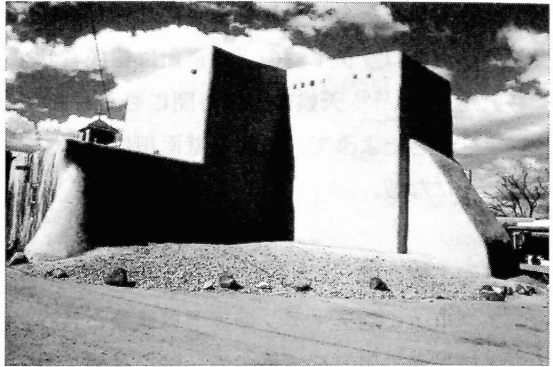
図版 6

プエブロ・インディアン達は、「ハカル」と後にスペイン語でよばれるようになった柳の細かい木の枝を格子状に組み合わせたネット状の支えで隅を補強していたが、この土着伝統技法は植民者たちにも採用された。

壁の厚さにも大きな違いがある。植民者の建造物は平屋建て個人住居でも壁の厚さは45～50センチメートルあり、教会堂のように大規模建築だと1メートルに達する。ネイティブ・アメリカンのものはこれに比して約半分位の厚さしかない。プエブロ・インディアンの独立型個人住居で2階建て、3階建てのものがあるが、その場合は1階部分の壁の外側に新たなアドベの層を積み上げてゆく工法を採用し、トータルで壁が厚くなる構造となっている。壁が厚いということは、外気の影響や騒音から遮断され、防災面で安全が確保できるという安心感がある一方、



図版 7

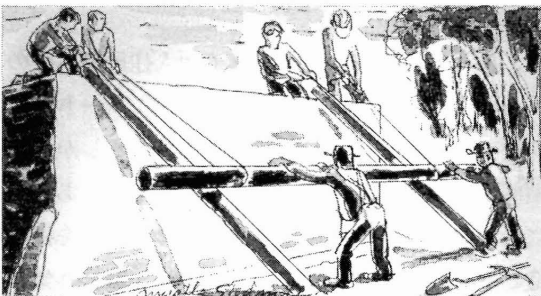


図版 8

窓や扉の仕様は制限され、室内が暗いとか、圧迫感があるなどの影響が生じる。<sup>(注7)</sup> (図版 7、8)

### (3) 屋根

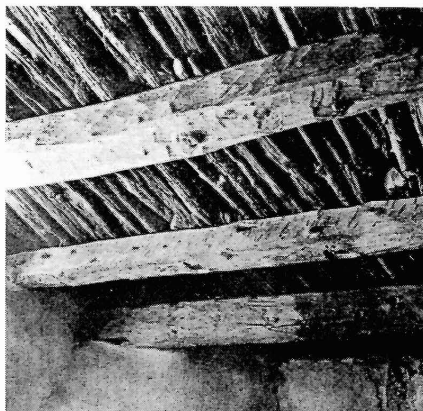
壁を積んだ状態が安定し、内部まで乾燥するまでに約1週間から10日かかる。次に屋根で空間を覆う作業に入るが、その前にまず丸太を用意しておく。太さは直径15~40センチメートルのものともまちだが、一軒の家の屋根全体に同じ太さの丸太が使用される。長さはこれも部屋の大きさによって違ってくるが、丸太1本あたりの重量が多いと壁の耐久力や持ち上げ作業にも支障がでてくるので大体5~7メートルの長さが標準である。逆に考えれば、この丸太の長さや重量に合わせて部屋の大きさや壁の厚さが決まるということでもある。ちなみにこの丸太の水平構造材は「ビガ」と呼ばれている。長さや太さを揃えた丸太の皮を剥いた後、壁に斜めに渡した丸太を使いコロの原理でロープを使って引き上げてゆく。(図版 9) ビガは必ず長方形の平面プランの狭い方の壁面に平行して置かれる。間隔は大体1~1.5メートルの間隔で置いてゆくが、丸太の両端は壁面



図版 9

に挿えて切り取らず、突き出たままにしておく。乾燥気候のため、日本のように湿気で腐ってゆくようなことはない。これが極めて特徴ある意匠となっている。

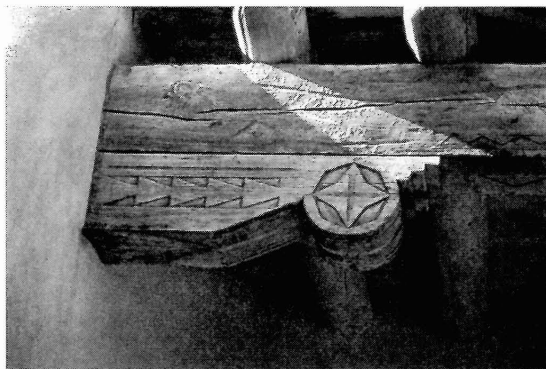
次に、等間隔に置かれたビガの間をうめるようにこれも長さをそろえた細い枝を並べてゆく。(図版10) ここに平板が使われるようになるのは機械製材が可能となる19世紀後半以降のことだ。そしてこの細枝の隙間をさらに細い枝や草、植物の葉で埋めたあと、その上にアドベと



図版10

同じ粘土泥をモルタルのように敷きつめてゆく。この層の厚さは20センチに達するから、流し込むといった方が正確かもしれない。また工期短縮のためにアドベ・ブロックをまず敷きつめてから上部表面だけモルタルで覆う方法を採用することも多かった。仕上げ工程でゆるやかな傾斜をつけるか浅い溝を掘り、あらかじめ数か所に用意しておいた排出口(カナーレ)に雨水や雪解け水が自然に集まるようにし、アドベ壁から十分離れた地面に排出されるようにしている。耐久性を増すため、このモルタル屋根の表面にさらに川から採取してきた砂利石を敷きつめる例もある。<sup>(注8)</sup> 19世紀後半になって石炭の生産力が高まるとピッチやアスファルトの入手が容易になり、こういった材料でコーティングすることも一般

化した。



図版11

屋根の荷重は壁で支えるわけだが、特にビガと接触する部分を補強するために「プレテイル」(英語で「パラベット」、縁石のこと)を入れる。プエブロ・インディアン建築ではこのプレテイルは石製で壁の中に埋め込まれるが、スペイン人の建築では木で代用

することもあった。これはビガの下の室内空間側にさらに持ち出し肘木を取りつけるためである。機能的には補強のためだったが、様々な意匠の装飾が施された。(図版11)

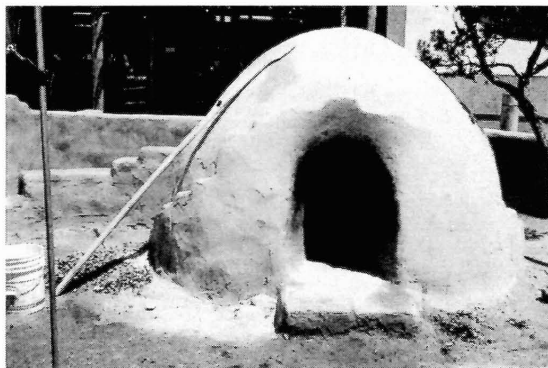
#### (4) 換気

屋根には煙突穴が設けられる。その位置はプエブロ・インディアンのものと植民者のものでは大きな違いがあった。プエブロ・インディアンは全ての料理を通常屋外で行う。従って室内で火を燃やすのは冬の暖房と団欒が主たる目的となる。このため部屋の中央で火を燃やすので、排気口も部屋の中心上に設けた。プエブロ・インディアンが暖炉を部屋の隅に設けるようになったのはスペイン人到来以後のことだった。これに対して植民者達は日常の炊事は室内で行った。竈も兼ねた暖炉は部屋の角隅に設けたから、排気口もまた部屋の隅につけられた。(図版12)しかし18世紀になるとパンを焼いたり燻製料理を作る時はプエブロ・インディアンに習って屋外に築いた「オルノ」と呼ぶ竈を利用することが多くなる。(図版13)



図版12

植民者の住居はごく初期を除いてワンルーム形式であることは少なく、居間や寝室など各部屋の隅にひとつ暖炉が設置される構造が普通となる。暖炉は床からは段差がつけられ、開口部は縦長の楕円形になっている。燃料は薪だが、夏の間にはできるだけ蓄え



図版13

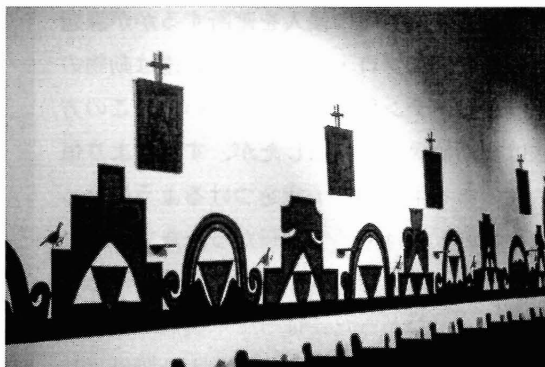


ておかねばならなかった。生木でも湿気は少ないので一夏乾燥させればその冬には十分使えた。

### (5) 仕上げ

アドベ壁の内外それぞれの壁面にはモルタルが塗り込まれる。この作業はプエブロ・インディアンの場合も植民者の場合も女性の仕事とされ、スペイン語で「エンハラドーラ」と呼んでいる。<sup>(注9)</sup> 手塗りの微妙な凹凸や丸みを帯びた角の仕上げが、シャープで無機質な現代建築のエッジとは対照的で、この「ゆるさ」もアドベ建築の魅力となっている。プエブロ・インディアンの伝統ではアドベと同じ材料を使うが、植民者の間では入手可能ならば白い石膏モルタルを使った。耐久性が高いということの他に見栄えがいいという理由があったと思う。しかし自然のカルシウム石を細かく砕き、小麦粉と水を加えて煮る1回の工程には3日程かかり、これも女性の仕事となっていた。このため19世紀末になってセメントが手に入るようになると、外壁部分は準備が短期で済むセメント仕上げにする例も増えてきた。セメントを使用すると耐久性は十分に増すが、発色が悪いため、仕上げには白あるいは褐色の塗料を上塗りする。モルタルは1年位のサイクルで塗り替えるのが理想だった。壁画などの装飾もその度に描き直される。(図版14) 塗り替え作業中に発見したアドベ壁の傷みを補修する

作業は男性の仕事である。



図版14

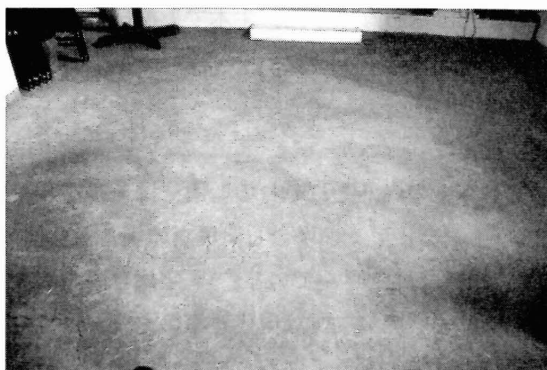
### (6) 床と窓

床も壁と同じモルタルで塗り込める。これによりソフトで弾力のある感触がえられたし、冬には熱を逃がさない効果もあった。床にはしばしば、動物の毛皮や織物を敷いたので平らで均質な床面が望まれた。床から埃りが立たないように、床

のモルタル表面には動物の血を散布してカチカチに固めた。

(図版15)

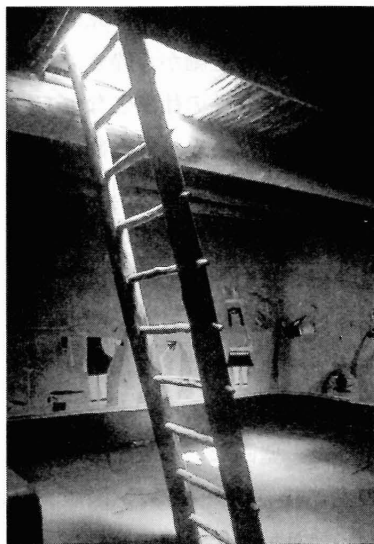
窓は一般に小さく、プエブロ・インディアン(プエブロ・インディアン)の住居の場合は窓が全くないこともある。外敵からの攻撃に備え、出入り口も明かり採りも排気口も兼ねた開口部をひとつだけ天井に設け、はしごを使って出



図版15

入りする仕様のものがその例だ。敵に襲われた時は内側から閉めてしまえば絶対侵入できない構造である。<sup>(注10)</sup> (図版16)

窓を設ける場合、板ガラスのない時代はどうやって外気や雨の侵入を遮断するかが課題だった。プエブロ・インディアン達は動物の毛皮をカーテン代わりに使っていた。この方法は初期植民者も利用したが、すぐにより恒久性のある木製の格子窓をつけるようになった。鉄の入手は極めて困難だったため、安全と装飾のために窓の外側に鉄格子をつける事はほとんどなかった。従って木製窓の場合もまず安全優先のために分厚く丈夫な設計にし、小さいサイズにまとめた。板ガラスに代わる



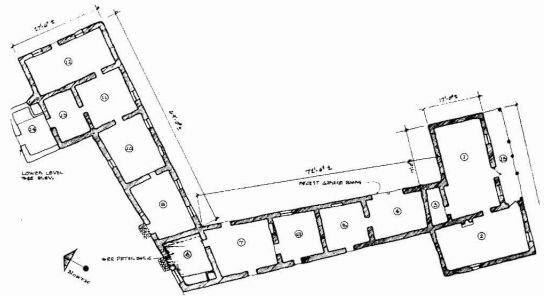
図版16

透明素材を利用した例もあり、代用品としては、自然に存在する雲母あるいは水晶の塊りを薄く板状に剥したものが利用された。<sup>(注11)</sup>

## (7) 間取り

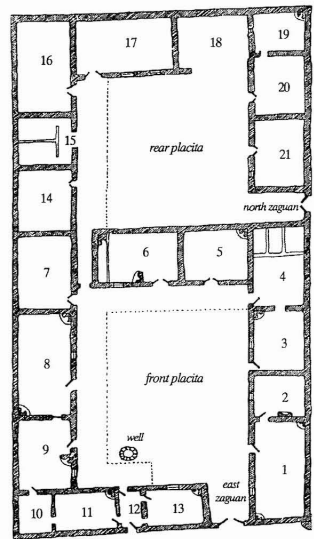
建築素材にアドベを多用するといった特徴は共通であっても、植民者家屋の間取りは時代と共に変化してきた。17から18世紀初期、即ち「新しいメキシコ」初

期の植民者たちが最初の住居とした建造物はワンルーム形式のものだった。後で増築する場合はは長屋式に一定方向に新しい部屋をつないでゆくことで解決した。(図版17)しかし18世紀中頃から登場する、広大な土地を所有し経済的にも豊かになった成功者たちは、正統なスペイン式のアシエンダ建築を欲した。これはパティオ(中庭)を中心にその回りを個室が取り囲むという間取りのものだった。パティオのサイズによって部屋の大きさや数が決まってくるが、家族や同居従業員の数が増えてきた場合には、すでに存在するパティオ・ユニットに隣接させる形で新たなパティオ・ユニットを接続させていった。(図版18)



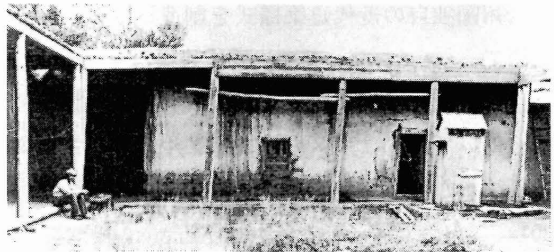
図版17

この建築様式を維持してゆくには幾つかの問題が生じた。冬の積雪期にも一度自室から外にて回廊を歩かないと別室に行けない構造は寒くて不便だった。それでも回廊が全ての部屋同士をつないでいればまだよい。アドベ構造建築ではパティオに向かって開放された回廊を支えるのは木柱のみで、またアドベ建築全体の屋根が低いため、その高さに準じて無理に回廊部を造ろうとするとトンネルのようになってしまうのだ。(図版19) 解決策として居住区全体の屋根を高くしようとするとは今度は



図版18

またアドベ建築全体の屋根が低いため、その高さに準じて無理に回廊部を造ろうとするとトンネルのようになってしまうのだ。(図版19) 解決策として居住区全体の屋根を高くしようとするとは今度は



図版19

それに合わせて壁を厚くしていかねばならず、回廊スペースをとろうとすると中庭を小さくするか部屋を小さくするしかなかった。結局、ほとんどが回廊部を削るという選択肢を選んだが、パティオ形式建築の魅力は薄れた。<sup>(注12)</sup>

次にメンテナンスの問題が発生した。大邸宅では壁の面積も広いため、定期的にモルタル壁を塗り替えるコストと時間がかかりかかった。19世紀になるとパティオ形式の家は人気がなくなり、より実用的なI字型、あるいはL字型の平面プランをもつ家が主流となってきた。これはまたヒスパニックでも使用人を持たない中流階級以下の家族単位の生活をする人、農牧業でも小規模自家経営で営む階級の増加と関連し、全体の部屋数が少なくなる代わりに居間を中心に各部屋へのアクセスが可能な設計となっている。そして次の段階では、ニューメキシコの建築史の中では画期的な「トタン屋根の民家」形式の登場を促した。<sup>(注13)</sup> 先住民時代から延々と続いたアドベ建築の呪縛からの解放であり、工業化社会の恩恵を受け、軽やかな複層階を持つ切妻屋根と木のフローリングの家が辺境の地にも花咲いた。トタン屋根の建造物ブームは19世紀末から20世紀までの約50年間続くが、1920年代に入ると、その反動がやって来た。次章ではプエブロ・リバイバル現象とアドベ建築の復活について述べる。

## 2 プエブロ・リバイバル建築

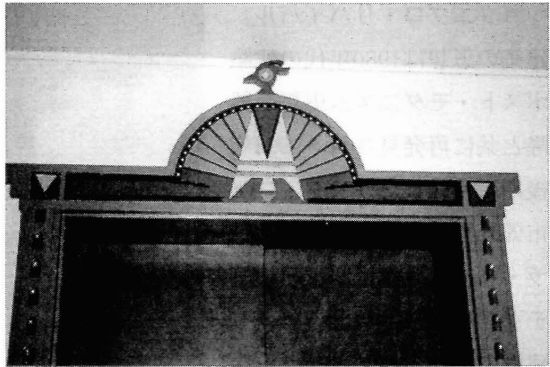
1920年代から30年代にかけて、ニューメキシコの伝統文化に関連して興味深い建築現象が登場した。ひとつは「プエブロ・デコ」様式の登場である。この言葉は「アール・デコ」をもじって生まれたようだが、要するに近代技術工法によって作られる機能を特定した建築と、その建築が建てられる以前からその土地に存在する土着の美術表現との融合をめざすものだった。「プエブロ・デコ」はアメリカ合州国独自の近代建築様式を創造したいというアングロ・アメリカ人建築家の造語で、「プエブロ・デコ」様式建築はネイティブ・アメリカンやヒスパニックの文化伝統を強く残すサウスウエスト諸州に数多く建てられ、その多くが現在でも残っている。ニューメキシコ州アルバカーキ市にはプエブロ・デコ様式を代表する〈王のなかの最高の王〉という名称を冠した「キモ・シアター」がある。(図20)

プエブロ・デコ様式が西欧近代建築を土台に、サウスウエスト伝統の非アング

口的な美術意匠を取り入れたもの、言い換えれば土着伝統の近代建築への同化とすれば、「プエブロ・リバイバル」建築は、西欧近代建築を土着化する発想、すなわち近代建築のサウスウエストの土地環境への同化というベクトルを持っていた。その早い例として1920年代に建てられたサンタ・フェのアドベ建築「ラ・フォンダ（現ホテル）」や「ザ・キャピタル」の名で親しまれているプエブロ・インディアンの集会施設「キバ」を模した州政庁が挙げられる。（図版21）近代建築のひとつである「プエブロ・リバイバル」の発想は、フランク・ロイド・ライトの形態と機能を統合的



図版20



図版21

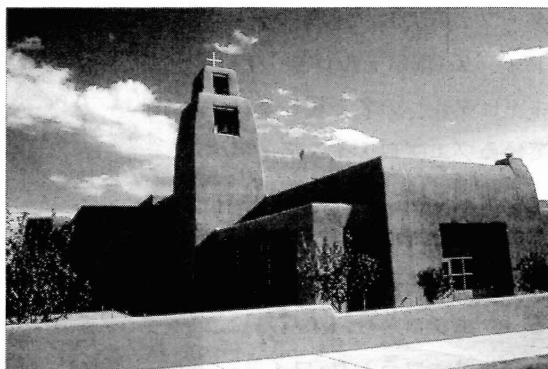
に考える有機的建築理論から発展したものだ。さらにその背景には、アメリカ人のためのアメリカらしい建築を創造したいというL・H・サリバン以来の情熱がある。

フランク・ロイド・ライトは1910年代から20年代にかけて日本やカリフォルニアで幾つかの重要なプロジェクトを手がけた後、28年にアリゾナを訪れ、後にはこの地を創作の拠点としている。<sup>(註14)</sup>そしてニューメキシコの気候風土や伝統文化に有機的に融合した建築の実践は、ライトの理論に感化されたジョン・ガウ・ミームが担当した。1920年に結核治療のためサンタ・フェのサナトリウムに入院していた元土木工学専攻のミームは、ここで文化人知識人サークルとの交流を深め、サンタ・フェのヒスパニック文化遺産の保護と復活にかける情熱に共鳴し、

建築面から協力するようになった。結核から回復した1920年代後半から、ミームは実験的に12軒ほどの個人住宅を手がけ、ジャーナリストの付けた「サンタ・フェ・スタイル」の名称で注目されるようになった。1930年代に入ると本格的にアドベ素材を使うのは勿論、古いミッション建築構造からデザイン要素を借用したり、古くて崩壊寸前の廃屋から建材を再生させたり、自然光をうまく利用した、現在でいうエコロジカルに土地風土と密着した建築を試みた。パラヘやマッカーティス、サン・ラファエルといった北西部農村の教会堂はじめ、1940年代以降にニューメキシコで新規に、あるいは再建とか改修で建てられた宗教建造物、公共建築から個人住宅はそのほとんどがこの「プエプロ・リバイバル」建築様式に準拠し、ミーム自身が手がけた作品も30点は現存する。<sup>(注15)</sup>

#### 「プエプロ・リバイバル」

建築の思想は1980年代の建築ポスト・モダン思想の興隆と共に再発見され、1994年後期に完成したサンタ・フェ市郊外のサンタ・マリア・デ・ラ・パス教会堂は20世紀建築テクノロジーと伝統のアドベ建築の特性、パノキユラーな地域住民の感性や信仰の意志



図版22

を融合させた完成度高いポスト・モダン建築の代表となった。アドベ建築が西欧から発生した近代建築や現代建築と対立し、過去の遺物として葬り去られることはなく、逆に近・現代建築の成果をニューメキシコの土地に同化させる媒体となっている。(図版22)

#### <脚注>

- (1) 1521年のエルナン・コルテスの征服直後から旧アラスカ帝国北限の向こう側に広がる広大な土地への興味はあったが、探険は遅々としたものだった。「新しいメキシコ」(nuevo mejico)の呼称は1540年のフランシスコ・バスケス・デ・コロナドの遠征前後には文献に登場してくるが、明確な領土として定義さ

れ、冠詞をつけた“El Nuevo Mexico”と命名されたのは、1563年に記録された聖フランシスコ会修道士フランシスコ・デ・イバラの公文書からである。本稿では単に「新しいメキシコ」と表記する。詳しくは拙著、「ニューメキシコ第四世界の多元文化」(新評論、1998)第三章一、pp. 158~168を参照。

- (2) Ferris, Stan, *The Adobe Alternative*, Featherweed Press, 1994, pp. 4~5, Stedman, Myrtle & Wilfred, *Adobe Architecture*, Sunstone Press, 1987, Introduction, などを参照。UNESCO世界遺産に登録されたマリ共和国ジェンネ旧市街やトンブクトゥなどアフリカには印象深いアドベ建築が多い。
- (3) 筆者の基本的な視点である。第二章でも述べるが、フランク・ロイド・ライトの機能主義以来、アドベ建築は「アメリカ的」な建築を目指す建築家にはその指標となってきた。ただし筆者はまだCS(カルチュラル・スタディーズ)的にアドベ建築に権力のヘゲモニーとの相関関係を論じた文献にまだ接していない。対象が木彫作品だがサウスウエスト美術の社会的機能の歴史を論じたものに Briggs, Charles L., *The Wood Carvers of Córdoba, New Mexico, Social Dimensions of an Artistic "Revival"*, The University of New Mexico Press, 1980, がある。
- (4) Ferris, op. cit., PP. 6~7, 10. Dickey, Roland F., *New Mexico Village Arts*, The University of New Mexico Press, 1990(reprint ed.), pp. 33~43, など参照。
- (5) Dickey, *ibid.*, PP. 33~36.
- (6) この重量は乾燥前のもので、乾燥後のものは10kg前後である。現代の現場では幾つかの異なるサイズの木枠を用意して乾燥効率と肉体への負担を減らす工夫をしている業者が多いそうだ。(アニタ・ロドリゲス施工の民家作業現場の職人へのインタビューより。1995年6月21日。)
- (7) 民家の事例として筆者はプエブロ・インディアンに住居しか見ていない。スペイン植民者以降の民家は平家の事例のみ。ただし公共建造物では複層階のものはあるが、最初からそのように設計されたもので増床の結果ではない。
- (8) カサンドラ・レイドの実家屋根の吹き替え工事での観察。現代ではアスファルトを塗布した既製品のシートをかぶせ、その上に石をおいてゆくのが一般的なようだ。

- (9) Enjalador (a)はEnjalbegarからの派生語と思われるが本稿執筆までに語源を解説した文献に出くわしていない。同様になぜ女性の仕事となっているのかも不明。但し、セルフ・ビルドでなく業者施工の場合は男性も従事する。通常は3層で下から、スクラッチ・コート、ブラウン・コート、仕上げコートとなり、それぞれに市販品がある。スクラッチ・コートのくいつきを確実にするため下にネットを張っておく例も観察したが、コストの点からあまり一般的でないようだ。
- (10) 縦壁に木枠をはめる場合、建築後の乾燥で10センチ以上は沈むため、1年位は仮枠を使い、その後に正式なユニットをはめ込む。
- (11) 板ガラスの普及以前の雲母の使用はアメリカ大陸全体に見られる現象である。ボリビア、パラグアイのイエズス会ミッションでは積極的に導入された。現代建築でも伝統へのこだわりからあえて雲母や水晶の薄片を使用する例もあるが技術者も少なく、高価になってしまったため、象徴的な意味づけのためである。
- (12) 現実に19世紀以前のオリジナルな仕様を残している事例は見当たらなかった。全て図面からの推察である。Bunting, Bainbridge, Taos Adobes, Spanish Colonial and Territorial Architecture of the Taos Valley, University of New Mexico Press, 1992, 中に掲載されたLee Booth, JeanとSims, William R. の図面(1964年製作)を参照。
- (13) 19世紀に鉄道が敷設されることにより、東部で生産される様々な工業製品がニューメキシコでも流通するようになった。建築資材ではコルゲート(波状)金属延板の流通がサウスウエストの農村風景を変えた。太陽の光りを受けてキラキラと輝くトタン板屋根の個人住宅や教会堂などは、いわば近代文明の象徴であり、アングロ流の近代化社会に同化してゆくことが必須だった時代精神の反映でもあった。もはや重たいピガを運びあげることもなく、平家造りである必要もなくなり、軽快な切妻屋根構造も可能となった。天井をつけない吹き抜け構造も、窓を高い位置につけることも可能となった。切妻屋根には、屋根の勾配を一方だけにとる片切妻型と、屋根の中央を最高点として勾配を等しく2方向にとる両切妻型に大きく分類されるが、ニューメキシコ州で採用されたのは両切妻型である。横から見た時の三角空間、特にアドベ建築では得られなかったシャープなポイントがいかに新時代風にみえたことだろう。屋根の重



量が軽くなり、壁も薄く、高くすることが出来たし、内部空間も広くとれ、また窓の木枠も薄くなり、外光も取り込みやすくなった。但し、垂直壁には従来通りのアドベ素材を使い、部屋の隅に暖炉を設けるのが大多数だった。このトタン屋根の導入によって、同時代に誕生した様々な建築意匠をとり入れることも可能となった。具体的にはアングロ・コミュニティで流行したビクトリア朝様式と、メキシコなどラテンアメリカ諸国で流行した新古典主義様式をイメージしている。といってもニューメキシコ州で実物のビクトリア朝様式や新古典主義の建造物を見ることは不可能なことだったので、文献、それもかなり世俗的な出版物を通じての引用だったと推測する。筆者はサンフランシスコ市など大都会で流行したビクトリア朝建築意匠の一番の特徴は正面階段部にあったと考えるが、この玄関へのアプローチに階段を用いるデザインがニューメキシコで導入された事例が多い。つまり建造物の基礎部分と床を上げ、木のフローリングで仕上げた。ニューメキシコ州における20世紀以前のトタン屋根民家は全てI字、あるいはL字型の平面プランを持ち、どちらのプランでも1階部分にバルコニーをつけるのが一般的なようだった。バルコニーは木造で、軒の支えとなる柱の柱頭部分にはギリシャ・ローマ風の新古典主義様式エンタブラチュアがつけられ、柱頭周辺は地元職人によるキッチュな装飾が施された。こういった無国籍なく文化住宅>的建造物の流行は近代社会の表象のひとつなわけだが、完全に無国籍ではありえなく、アドベ壁にトタン葺きの切妻屋根、ビクトリア朝様式の階段と床、新古典主義風バルコニー柱装飾の組み合わさった民家の存在はサウスウエストに限定された多元文化社会を象徴するものになっている。ちょうど日本のマンション建築なるものが和洋折衷の産物で、サイズ規格や畳の部屋があることなどと比較考察すると興味深い。

- (14) ライトのこの時代についての従来の研究では停滞期というようなネガティブな記述が多かったが、最近は大きく修正されるような研究の成果が発表されてきている。筆者はこの部分の記述を大きく Aloffson, Anthony, Frank Lloyd Wright, *The Lost Years, 1910-1922, A Study of Influence*, The University of Chicago Press, 1993, に負っている。
- (15) 筆者は現存するミームの全作品を見ているわけではない。この記述は Weigle, Marta ed., *Hispanic Arts and Ethnohistory in the Southwest*,

Ancient City Press, 1983, P. 182, 186, 206, 210, 212, 217を参照。プエブロ・デコについては、Breeze, Carla, Pueblo Deco, Rizzoli International Publications, 1990, を参照。

### <図版データ>

- (1) 典型的な平屋式アドベ住宅、サンタフェ市内、©S a r b o.
- (2) 3階建タオス・プエブロのアドベ集合住宅、タオス、筆者撮影、1996年。
- (3) イン・アト・ラレト前景、サンタフェ市内、©S a r b o.
- (4) アドベ・ブロックの製造、Lloyd Lozes Goffの素描、1949年。(出典：Dickey, Roland F., New Mexico Village Arts, The University of New Mexico Press, 1990, p. 35.)
- (5) アドベブロックの積み方(スペイン植民者式)、Wilfred H. Stedmanの素描、1936年。(出典：Stedman, Myrile and Wilfred, Adobe Architecture, Sunstone Press, 1987, p. 31.)
- (6) 石を用いた基礎たちあげ部分、トレス・ピエドラス村、無垢の御宿りの聖母教会堂、筆者撮影、1996年。
- (7) アコマ・プエブロのスカイシティー住居、2階建に増床中のアドベ建築、筆者撮影、1995年。
- (8) ランチョス・デ・タオス教会堂内陣部外観、筆者撮影、1995年。壁厚は120cmもある。
- (9) ビガの持ち上げ、Wilfred H. Stedmannの素描、1936年(出典：Stedman, op. cit., p. 35.)
- (10) ビガの間を埋めるシーダー材のラテイアス、Bunting Bainbridge 撮影、1964年。(出典：Bunting, Bainbridge, Taos Adobes, University of New Mexico Press, 1992, P. 59.) 丸太は面取りしてある。
- (11) 木製パラペット、アビキュー市、サント・トマス教会堂、筆者撮影、1996年。
- (12) 台所の竈兼暖炉、個人邸、タオス市内、筆者撮影、1995年。
- (13) 屋外のオルノ(竈)、インディアンプエブロ文化センター復元、アルバカーキ市、筆者撮影、1995年。
- (14) 毎年修復される壁画の事例、ラグーナ・プエブロ内サン・ホセ・デ・ラグー

ナ教会堂身廊部。筆者撮影、1995年。

- (15) 塗り固めた床の事例、ラグーナ・プエブロ内サン・ホセ・デ・ラグーナ教会堂身廊部。筆者撮影、1995年。
- (16) 天井に設けられた出入口と梯子、ペコス・ミッション、ペコス。筆者撮影、1996年。
- (17) 長屋タイプの間取り図面、ソフィア・フェルナンデス個人邸、リャノ・ケマド村、ニューメキシコ、Booth, Jean Lee製図、1964年。(出典:Bunting, op. cit., p. 51)
- (18) 複数パティオ居住空間間取り図面、アシエンダ・マルティネス、タオス市。アシエンダ・マルティネス財団製作。1995年コピー取得。
- (19) 1923年頃残存していた中庭回廊部バルコニー、パスクアル・マルティネス邸、タオス市郊外、1923年。ロウェナ・マルティネス夫人提供。(出典:Bunting, op. cit., p. 26.)
- (20) プエブロ・デコ様式建築、キモ・シアター正面部、アルバカーキ市、筆者撮影、1995年。
- (21) プエブロ・デコ様式装飾、ラ・フォンダ・ホテル1階エレベータ部、サンタフェ市、筆者撮影、1995年。
- (22) プエブロ・リバイバル様式建築、サンタ・マリア・デ・ラ・パス教会堂全景、1994年完成。筆者撮影、1995年。